

W.A.Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第39号

畏友ミキオさんのこと

モーツァルトへの手紙 (その15)

会員番号 K.618 加藤 明



○ 縁あって、今春から五城目町のR285沿いにある道の駅に赴任しました。

奥深い森を背景にした自然の恵み豊かなロードステーション。還暦を経過した後、小生が携わる三つ目の道の駅となります。その中でも抜きんでてあなたの旋律（とりわけ管楽系の曲）がマッチングし、隅々まで冴えわたる素晴らしい自然環境です。

その立地特性から、近隣の市町村とは異質な文化を育ててきた「朝市のある町」五城目。赴任当初は、父の生まれ故郷であり、小生が小学5年生から父が他界する高校3年まで居住していた地域でもあるため、半世紀を経て舞い戻ってきた浦島太郎然とした奇異な想いで通い始めたものでした。奇しくも今年は古希を祝う中学の同期会が開かれ、否応なしに一つの節目を確かめるというオマケがつきまして。ああ、もうすぐあなたの二倍も迷路のような人生を生きることになるのですね・・・。

○ 前回（第38号）の「モーツァルトへの手紙」で、ウィーン時代のあなたを描いた映画《アマデウス》についてしたためたのは今年の12月5日（命日）のことでした。

その同じ12月の初旬に、東京・有楽町の映画

館で32年ぶりにあなたをテーマにした作品が公開されました（生誕260年記念）。題して《プラハのモーツァルト》。ご丁寧に「誘惑のマスカレード」という副題までついたイギリスとチェコの合作映画です。

他ならぬあなたをテーマにした映画ですから、師走の繁忙期にもめげず、小学生の修学旅行なみに浮き浮きしながら、早速（日帰りでしたが）有楽町で観てきました。

残念ながら、前評判の割には終始ワクワク感が湧かず、何かしっくりしないままトボトボと帰路についたというのが正直なところです。その理由は、ストーリーもさることながら、やはり、モーツァルト役のA・バーナードが典型的な二枚目だったことから小生の識るあなたのイメージとはかけ離れていて（失礼!）、その違和感を解消できないままドラマの終焉を迎えたことに尽きると思われます（反面、往時のプラハの景色や貴族社会の実情を描いており、もちろん映画ならではの醍醐味はありましたが・・・）。

そう考えると、傑作《アマデウス》であなたを演じたトム・ハルスがいかにはまり役であったか、そして、脚本のP・シェーファーはじめ

監督のM・フォアマンがどれほど優れた映画作家だったかが改めて証明されたように思ったものです（そのM・フォアマンは今年の4月に84歳で亡くなりました。彼がこの映画を観たらどう思ったかなあ）。

さて、今回は偶然のことながらあなたの262回目の生誕祭の当日に、そちらに旅だった友人の話を綴ることにしました。あなたにとっては彼のホルン奏者、ロイトゲープみたいに長く親しんだ存在であり、小生にとっては畏友とも言える人でした。



音楽や絵画といった美しいものに出逢ったときのように、一人の人間がもう一人の人間に否応なしに感動を与えるということが間々あるものです。

年に数回という対話の頻度の少なさもあるのですが、その風貌、眼差しや野太い声といい、迎い容れる笑顔といい、時間を忘れさせる何かを持っている人。

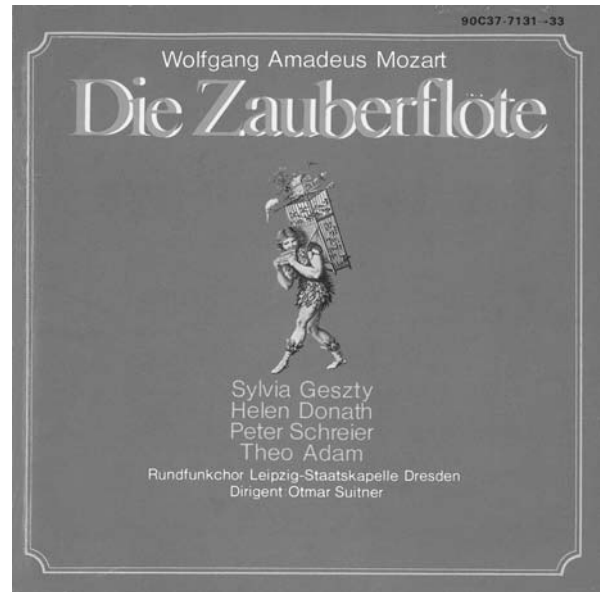
長い間友人として真正面から向き合ってきたミキオさんは、小生にとってそんな存在の輝きを讃えた稀有な人物でした。

「これ、親父の遺品にあったモーツァルトのオペラらしいけど、良かったら貰ってくれないか？」

「スウィトナーの《魔笛》じゃないか！ 良いの？・・・ありがとう、大事に聴くから・・・。お父さんモーツァルトのファンだったんだ・・・」。

これは、もう20年にもなろうとするミキオさんとの出逢いで最も印象に残っている正に感動的なやりとりのシーンです。

ミキオさんはA銀行の中央市場支店長として赴任してきたばかりでした。



当時の仕事の関係で以前からその支店には訪問していたのですが、同い年ということもあったのでしょうか、初対面なのに昔から小生のことを知っているような洞察力と人懐っこい人柄に一瞬にして惚れてしまったことを憶えています。

ミキオさんとは、小生が苦手で彼が大好きなお酒とゴルフ、つまりは夜とグリーンに関することを除いた、様々なつきあいを通して感動を頂いてきたのです。

とにかく小生の仕事に関することや「モーツァルト広場」の運営に対しても、きっちりと応援してくれる律儀で優しい人でした。

ミキオさんが凄いののはA銀行を退職後、出向先の地元企業の社員に請われ、その責任感から急きょ新会社を興し、社長業に就いたことでした。

そして、悠然と経営に挑み、見事にその事業を軌道に乗せたのですから。

ミキオさんとはモーツァルトはもとより、音楽の話題に一度も触れたこともありませんでした。ミキオさんがその世界に関心がないからではなく、ミキオさんの人生を走るスピードが速すぎるため、こちらからの彼に対する問いかけが多くなり、それどころではなかったからです。

小生から「どうやってここまでやってきたの？」といった質問、彼の想像力を知るための不躰な詰問を投げかけるのがお会いした際の常でしたから。

そんなミキオさんが一昨年突如病魔に侵され、入退院を繰り返すようになったのを昨年の夏に知りました。

ようやく連絡がとれるようになった8月に、電話口でミキオさんが言うには、「あなたのところで社員の懇親会をやりたい」、「アワビを社員に食べさせたい」、とのことでした（「セリオン」内の「土崎湊屋」）。

そのため、事前に「お店を下見したい」というので、久しぶりに会えるのを愉しみに彼のセリオンへの来館を待ちました。

下見の当日の驚きを忘れることができません。あまりのミキオさんの変貌ぶりに言葉を失いました。

鋭く大きな眼光、威厳に満ちた容姿は健在であったが、明らかに病にやつれた印象で、一瞬小生を身構えさせました。

その小生の一瞬の狼狽を見逃さず、「どうした？ 顔が変わったからビックリしたべえ・・・」と茶化し気味のミキオさんでしたが、正直「これはやばい・・・」と痛感しました。

そして、懇親会の当日。

多くの社員諸兄を引き連れて悠然と現れたミキオさんは、その手に何かを持って小生の前に立ちました。小生を見つめる眼差しに笑顔がありません。

そして、やおら、「今日はよろしく！・・・これ良かったらどうぞ・・・」。

差し出されたその本は先年亡くなった高橋英郎の《モーツァルト》（講談社新書、副題に「生きる喜びを与えてくれる人間の歌」とある名著1983出版）でした。



「これ、親父の本だけど、あなたは持ってるやなあ・・・あれば持って帰るけど・・・」と古びたむき出しの本をニヤリとしながら譲ってくれたのです。

そういえば、高橋英郎の訃報に接して、蔵書の中から「モーツァルト366日」（白水社）を斜め読みしたのですが、この新書版には手を付けないうままでした。

「・・・いやあ・・・ありがとう！・・・」このあと言葉が繋がらず、また不意に狼狽えてしまいました。

この「贈与の儀式」に小生は出逢って早々のあの「スウィートナーの《魔笛》」の贈与のシーンを重ねてしまったからなのです。

そして、お父様の遺品のCDに始まり、お父様の遺された蔵書の《モーツァルト》で二人の関係が締めくくられるような、そんな不吉な予

感がよぎったのです。



ミキオさんとお店で別れたその日に、贈呈されたこの本、お父様の手垢がついた掛け替えなきこの《モーツァルト》を自宅で再度読み返しました。

お父様の蔵書印が実に4ヶ所に丁寧に刻印されていて、いかにお父様が大切にされていたかを偲ぶことができる本であり、CDと共にミキオさんが小生に遺してくれた親子による「二重奏の忘れ形見」となっていました。

「善く生きるとはどういうことか」、この哲学的な命題を引きずって不明な人生を歩んできた小生ですが、ミキオさんの魂に向き合うことで「善く生きる」ひとつの姿を学んだように思っています。

ですから、きっと天国で大好きなお酒とゴルフ三昧のミキオさんに、密かに、こんど小生からの贈与の品は何にしようかと今から思案しているところです。

「ナニコレ？」と狼狽えるミキオさんを想い描きながら。 end

音とクマの話題

会員番号 K.10 畠山久雄

熊が人間の生活圏に入り込んで、人を襲ったことが巷の話題となっている。6月20日には大館警察署が、釈迦内の北陽中学校の下校時間に合わせ、通学路でパトカーのサイレンを10秒程度鳴らす取り組みを始めたらしい。同署の地域課長は「熊が音に敏感だという性質を利用し、人間の存在や位置を事前に知らせているが、あまり長く鳴らすと、熊が学習してしまう。熊を近づけないようにして、子どもたちの安全を守りたい」と話している。(21日付魁新報)

秋田市金足の水心苑付近でも熊の目撃情報がある。ここでは、定時に「旧秋田県民歌」が、苑内の多数のスピーカーから、大音量で長時間流される。静かに散策したいと思う人にとっては耳障りな音量であるが、熊を寄せ付けないためであろうと解釈していた。しかし、大館警察署は10秒しか流さないのに、水心苑では5分も流す。悲しいことに、熊に学習させてしまった結果、熊が出没しているらしい。

大音量音楽の目的は違うところにあるらしいが、熊が学習し、人間が嫌ってしまうのはおか

しいので、水心苑サイドも学習して改善すべきであろう。



さて、どれ程に熊が新聞紙上を賑わしているのか、流行の検索機能を使って「熊」を探してみたら何とゼロ！、エエッ！おかしいでしょう。調べてみたら新聞紙上ではクマとカタカナで記している。私の頭の中では、熊＝クマですが、パソコンや、新聞上では違々と学習しました。ちなみに、6月だけ1ヶ月間の魁新報で、「クマ」検索結果は69件、さすがに多い！。

ところで、ヴァイオリンの記事を書いて下さった新聞記者に「バイオリンではなく、ヴァイオリンでしょう」と言ったら、新聞用語ではバイオリンと書かなければいけないと反論されました。熊とクマの両方を新聞で用いると、検索でクマと熊の両方を調べないと、正確な掲載数は出ないのは明らかです。人間の頭の中と、コンピューターや新聞は異なるのです。



クマの話題が続きます。五城目道の駅裏で、

写真のような看板を見つけました。ユーモアもあり、分かりやすく、巷のSNSでも好評です。

一方、お役所で作った「クマ出没注意報発令中!!」という文書があります。書き漏らしたと言われたくないのか、沢山の文字情報で埋められています。裏面には「クマによる人身被害マップ」が掲載されていますが、見てもらえるでしょうか。残念!、あまり読まれないかも知れません。

「クマ出没注意報発令中!!」は「クマ出没注意」で充分、「クマによる人身被害マップ」も「襲われた場所」とすると、おっ!と目を引きます。

つまり、伝えたいこと全てを書くのではなく、読んでもらえるように書くことが肝要だと思います。



☆

最後になります。モーツァルトは、自分の全てを譜面にしたのではなく、聴いてもらえる音楽を譜面にしたと、私は感じています。

酒とモツの日々 (39)

会員番号 K.488 佐藤 滋

心躍る『冬景色』となった冬季五輪も終わって、今度は東京オリンピックへのカウントダウンが始まりました。2年後の今ごろはビール片手に中継放送に一喜一憂していることでしょう。ピョンチャンでは、インフラの遅れや運営などいろいろ不安視されましたが、結果的に成功させた韓国の実力はたいへんなものだと思います。開・閉会式でのアトラクションも素晴らしかった。あの映像技術は素敵でしたし、これからのオペラ演出でも、こういったテクニックが大いに活用されていくのでしょうか。特に「魔笛」のような幻想オペラは新しい演出の時代を迎えることと思います。技術革新によってオペラの楽しみはますます広がって行くでしょう。時代が変わってもモーツァルトの音楽は変わらない、というのもまた凄いことです。

さて、韓国での開催前は「金」が取れるのか、

いや取れたとしても、ちゃんと「君が代」が演奏されるのか心配でした。何しろ「恨の国」ですから……。さすがに先進国なので杞憂でした。隣国から嫌われていても、私は「君が代」という曲は音楽として名曲だと思っています。歌詞も意味づけに拘らなければ旋律によくマッチしています。(元の詞は古今和歌集) 国が強制するからリベラル派が反発するのです。同じことが今年から評価の対象となる道德教育にも言えるかもしれません。国が介入するから堅苦しいのであって、道德そのものは社会生活に大切な指針であることに疑問はないでしょう。また唱歌が、戦前の軍国主義と戦後の言葉狩りによってヒステリックに介入されたのはご承知の通りです。『春の小川』は2回も書き換えられ、「メダカの学校」は生徒を甘やかす戦後教育の悪例として保守派に批判されます。(「誰が生徒

か先生か〜」とは学校の秩序を乱すもので如何なものか!) この国はクレーマーが多すぎます。まあ某国共産党のように、今でも歴史上の人物を善玉、悪玉に色分けし、統治に都合良く歴史を脚色しているよりマシですけど。ナチスドイツは、歴史上の作曲家さえ政治に利用しました。ワーグナーはゲルマン民族の優越性の象徴として、モーツァルトはオーストリアもドイツの一部であることの証として。(モーツァルトが生きていたらキョトン?) ソヴィエトの作曲家も死と背中合わせで創作しました。表現とは厳しい世界です。山の頂と同じく、頂点に立つ者ほど風当たりは強くなります。ふもとで好きなことをやっている我々は、もっと頂点の喜びと敬意を払わなければなりません。

その点では、「秋田県民歌」がいまだに「付度」によって、三番、四番の歌詞が日の目を見ないことは寂しい気がします。好戦的な「ラ・マルセイエーズ」「ルール・ブリタニア」等よりはずっと穏健で格調高いのに。古い映画と同じく歴史的価値を尊重し倉田政嗣氏(作詞者)のオリジナルのままで演奏される勇気をもちた

いと願っています。もちろん歴史的背景を学習して上で。

光が当たらない偉大なものに光を当て、その誕生、歴史、成功と挫折に心を寄せ、頂点を仰ぎ、心の糧とするのは歴史を深く知る喜びだと思います。モーツァルトの生涯と作品に心を寄せ、耳を澄ますモーツァルト広場の活動も、優れた歴史探訪の活動と言えましょう。介入、忖度、改ざんがはびこる世の中に、このような手作りの芸術鑑賞会は、これからも変化し続ける社会を人間らしく生きて行くための、かけがえない現代の装置であると思います。

.....

さて、変化と言えば来月になるとビール会社から秋味の新商品が出荷されます。これらは従来のものよりアルコール度数が高く、苦みの効いたものでありますが、飲んべえは喉ゴシの変化で『小さい秋見つけた』を感じるのがあります。モーツァルトさん、今年も貴方を聴きながら秋が迎えられそうですよ。ちょっとほろ苦い『夏の思い出』を味わいながら。

事務局より

私事ですが長男が今年就職しました。障がい者のため就労支援をしている一般企業に勤めていますが文句ひとつ言わず通勤している姿を見ると自分は何かあれば文句を言ってるなど反省します。見ていると通勤の際に好きなショップに寄って時間を潰しているよう。それが彼の心の支えになっているのかもしれ

ません。通勤時間の車の中で音楽を聴く(僕はラジオのニュースしか聞いていなかった・・・)、休み時間に読書をするなどなど。このストレス社会と向き合うには自分が流されないでしっかりしないとイケないですね。息子にいろいろと教えられたこの数か月でした。(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H30年7月現在95名)

モーツァルト広場

検索

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000(諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田(事務局) 080(1673)8322